恵誌、大正四年五月）』の三八三頁に、〝明治十二年頃まで大阪府病院の梅毒科長として、松山義定と名のり勤めたり〟と記されていることを改めて見出した。

さらに、昭和八年五月発刊された須田菊二著『松島遊廓沿革誌　全』（非売品）の二十二頁に、〝駆梅院が初めて出来、横浜から松山不苦庵（義定）が院長として赴任した〟と記されている。氏名をあげた文献はこれ以外に存在しないようで、これでやっと不苦庵が大阪の松島遊廓内に作られた駆梅院（須田氏の著書に図あり）に赴任したことが確定したのである。

しかし、不苦庵の出生、死亡の年もなお不明である。

（平成十一年十月例会）

古写本「長崎吉雄先生秘伝」について

中西淳朗

今回報告した古写本の題簽は、長崎の吉雄先生の秘伝と読むようで、内容は梅毒治療の処方集であった。一九九八年に入手した。

大きさは縦二四・〇センチ、横一六・八センチ。和紙二十丁四〇頁のヒモ綴本である。

何時書き写したかは「後がき」ではっきりしており、文政七年申とあるので一八二四年である。本文の書き手は不明であるが、字は下手で誤字も多く専門医師とは思えない。

この写本を買った人は第一頁にサインをしており、出羽庄内鶴ヶ岡七日町の佐藤茂七と読める。入手したのは天保八年即ち、一八三七年で酉年の三月となっている。このサインの脇に売り主の印が押してあり、同じ鶴ヶ岡七日町の三国屋という商人である。商印は丸に一引竜紋となっており上州の出身を想像せしめる。

この他、表紙ウラに日下部竹蔵という人のサインがあり、第二頁の〝天保九年二月夜〟という記入が、竹蔵の書体と似ている。鶴岡には幕末に日下部姓の医師が断罪されている（丁卯の大獄）ので、その一族かも知れない。

佐藤茂七は実在の人と考えられ、天保十年の七日町絵図面にその名を見出すことが出来る。七日町を東西に貫く道は藩政時代からの旧道で、その左右には羽黒山へ参詣する人々のための宿屋が散在していた。文政八年の人別帳によれば宿屋のうち、旅篭屋十五軒に対し、飯盛女をおく下旅篭屋が二五軒もあり、飯盛女は一〇六人いた。このような状況は幕末まで続いている。茂七は塗師であるが、どうやら下旅篭屋の知り合いが多かったと思われる。というのも天保十年のこの町ではやっと町医一名を数えるのみであった点を考えると、非公認女郎に蔭で薬情報の仲立ちをする人間がいてもおかしくはない。茂七はそんな男ではなかったろうか。

さて、この古写本のタイトルを信ずるならば、長崎の吉雄耕牛一門の流儀が見出せると考えた。今から一五〇年以上前の梅毒治療の極めつけ、ズブリマート・昇汞が出てこなくて

は研究の対象にはならない。これを標的に頁をくっていくと、三二頁から「生々乳製法」が書いてある。生々乳とは砒素を含んだ不純な昇汞のようで、原料をみてみると『黴瘡秘録』とほゞ同様であるが、焼き上げ法をみると、上火下水法という方式で吉雄耕牛も利用した方法である。

この「秘伝」の内容は、漢方的処方、軽粉を含む処方、薫薬方、外用薬、生々乳乃至ソッヒルを含む処方と、順序よく書かれていてひとつの特徴となっている。

また各処方について、島鴻子漸選の『医方巻石秘録』で追求してみたところ、次のことが判明した。「秘伝」の全二六処方のうち十三処方を「秘録」に見出した。そしてこの十三処方のうち、十二処方が内服薬であった。その上、八処方について出所が判明した。（例えば五宝丹は『万病囲春』、解毒剤、如神丸は吉益流、反鼻散は饗庭太仲流等）

さらに興味深いのは「秘録」にある南蛮流処方（ハシリコン処方、カンフラ処方等）は「秘伝」になく、「秘伝」にある生々乳乃至ソッヒル処方については「秘録」にはないという関係を見出した点である。以上により「秘伝」の方が「秘録」より新しい処方が盛られており、ツュンベリー来日直前頃（一七七〇年頃）の長崎で流行した治療が「秘伝」に記されていると推測できた。

この処方集の最後に、ソッヒル処方がある。これは書体からみて後の別人書き込みと考えられるが、オランダ流製法にもとづくソッヒル（ソッビルマートをなまって縮めた呼び名で昇汞のこと）があることで、長崎の吉雄先生の秘伝らしくなった点は可笑しい。

なお、薫薬法という薫煙吸収療法ものっており、これについては平成十一年九月例会において別に報告したので参照されたい。

（平成十二年一月例会）

永井　潛――断種法上の人びと（その三）

岡田靖雄

日本で断種法を推進していた人たちの頂点にいた永井潛（ひそむ）は、一八七六年（明治九年）一月一四日に広島県賀茂郡竹原町の、代代酒造家の家に、一三名同胞の二番目・第二男としてうまれた。第一高等学校をへて、一九〇二年（明治三五年）一二月に東京帝国大学医科大学を卒業した。同級に小池重、佐々木隆興、遠山郁三がいた。医師免許はとらなかったという。翌年一月に大澤謙二教授の生理学教室にはいって助手。三月には横浜をたって、主としてドイツ国ゲチンゲン大学のマクス・フェルヴォルン教授のもとに留学し、主として冬眠動物の新陳代謝を研究した。イギリス、フランスにまなんで、一九〇六年に帰国して、九月二九日に生理学教室の助教授となる（第二講座担当）。一九一五年（大正四年）一月二五日には大澤のあとをうけて教授となって第一講座を担当し、生理学総